

# 第四回女性部企画・特別講演

## 数学者として 母として 妻として

東京大学大学院数理科学研究科教授

石井志保子



本稿は、9月1日(日)開催の第4回女性部企画の特別講演を要約しました。(文責・編集部)

### 数学者として

#### 日本で数学に進む女性が少ない理由

日本の女性医師の割合は調査した二十四万國中、最下位の十四・三％(二〇〇四年)です。この少ない女性医師の割合と比べても、日本の女性数学者の割合は二・六％ですと少ないのです。

日本で数学に進む女性が少ない理由を考えてみると、女性は数学に向かないという思い込みが数学を苦手にしているのではないかと思えます。学校では、「女の子は数学が苦手」と生徒に言う先生が多いです。そうすると、女子生徒は、数学を考慮してちよつと困難にぶつかった時に「私は女だからできないんだ」と思っ

### 考えることが大好き

意外に思われるかもしれませんが、私は小学生の時算数がとても苦手でした。当時は授業で毎回、計算問題の小テストがあり、早い子から提出させるという試験のやり方でした。ところが、私はいつも遅いのです。他の生徒たちがどんどん提出して○をもらっているのに、私はいつもビリになっていました。いつもそのような状態で、小テストが大嫌いでした。ですがある時、計算はほとんどないけれど

足です。数学科に進んだ先に、大人はどういったキャリアパス、進路があるのかを知らないのです。私が、高校時代に研究者になりましたと先生に言ったら、「女の幸せとはそんなものではないよ」と言われました。私は研究者になったわけですが、決して女の幸せを諦めた、かわいそうな人ではないつもりです。十分幸せだと思えますし、女の幸せは十分に得られると思っています。

研究者の世界は大変厳しいです。同じ定理を他の人がすでに出版していたら、すでに別の人の論文の結果に含まれていたため、学術誌から却下されたことがあります。それを聞いた時、本当に落胆してどういう顔で家まで帰ってきたのか覚えていないくらいです。ですが、私はそれでも研究を続けたい。それは考えることが大好きだからです。

### 母として

高校に入ってから、特殊相対性理論の本を読み、大変感動しました。当時、私の価値観はカッコいいかカッコよくないか、その二つしかありません。そんな私にとって、これはもう最高にカッコいいものだったので。こういうカッコいい公式を自分も将来発見してみたいと夢に見ました。「志保子の定理」。こういうものを発見できたらいいなと思っています。

意外に思われるかもしれませんが、私は小学生の時算数がとても苦手でした。当時は授業で毎回、計算問題の小テストがあり、早い子から提出させるという試験のやり方でした。ところが、私はいつも遅いのです。他の生徒たちがどんどん提出して○をもらっているのに、私はいつもビリになっていました。いつもそのような状態で、小テストが大嫌いでした。ですがある時、計算はほとんどないけれど

足です。数学科に進んだ先に、大人はどういったキャリアパス、進路があるのかを知らないのです。私が、高校時代に研究者になりましたと先生に言ったら、「女の幸せとはそんなものではないよ」と言われました。私は研究者になったわけですが、決して女の幸せを諦めた、かわいそうな人ではないつもりです。十分幸せだと思えますし、女の幸せは十分に得られると思っています。

研究者の世界は大変厳しいです。同じ定理を他の人がすでに出版していたら、すでに別の人の論文の結果に含まれていたため、学術誌から却下されたことがあります。それを聞いた時、本当に落胆してどういう顔で家まで帰ってきたのか覚えていないくらいです。ですが、私はそれでも研究を続けたい。それは考えることが大好きだからです。

意外に思われるかもしれませんが、私は小学生の時算数がとても苦手でした。当時は授業で毎回、計算問題の小テストがあり、早い子から提出させるという試験のやり方でした。ところが、私はいつも遅いのです。他の生徒たちがどんどん提出して○をもらっているのに、私はいつもビリになっていました。いつもそのような状態で、小テストが大嫌いでした。ですがある時、計算はほとんどないけれど

足です。数学科に進んだ先に、大人はどういったキャリアパス、進路があるのかを知らないのです。私が、高校時代に研究者になりましたと先生に言ったら、「女の幸せとはそんなものではないよ」と言われました。私は研究者になったわけですが、決して女の幸せを諦めた、かわいそうな人ではないつもりです。十分幸せだと思えますし、女の幸せは十分に得られると思っています。



た。これならばどこかいい大学の研究室に就職できるのではないかと思います。いろいろなところに応募書類を送りましたが、さすが、この大学の応募しても不採用でした。もういくつ応募したかわかりません。これ以上自分は何をしつらいんだろうというふうに感じました。 いわば就職浪人を四年間続けましたが、幸い、九州大学で私の業績を高く評価してくださる方がいて採用されました。夫と子どもを東京において九州大学に行くわけです。決めるまでにこれは非常に悩みました。だって、家族は東京にいるわけですから、九州に単身赴任するという事です。それは無理だろうと思つて、夫に相談しました。すると夫は「行つたらいいじゃないか」と私を応援してくれました。なんとか東京と九州の間を行ったり来たりしながら、助手として頑張りました。その後、九州大学から東京工業大学、それから東京大学に異動して、数学の研究を続けていく環境を得ることができました。数学は本当に美しいです。その美しい数学をここまで続けてくるのができて本当に幸せだと思つています。いくつになつても数学の研究は続けたいと思います。

母として 妻として 子どものために頑張ろうという気持ちが 子どもの持つことは私にとつても大きな喜びでした。しかし、当時とても優秀な研究者が、子どもが生まれてから全く研究成果が上がらなくなつたという話を耳にすることがありました。私に子どもが生まれた時も、「これで石井も研究者としては終わらな」と言う人がいました。 確かに子育ては大変な努力と時間を使います。今まで研究に注いだ時間が削られてしましました。ほとんど勉強時間が取れず、泣きたい気持ちになつたこともありますが、持ちになつたこともありました。でも時間がないからこそ、仕事の優先順位をはっきりさせることができ、なにより、子どものために頑張ろうという気持ちが私を引つ張ってくれたのだと思います。振り返ってみると、子どもができてからのほうがよい仕事ができているのではないかと思います。

研究者としての社会的責任を 縁をいただき、夫が富山県知事を務めています。山県知事の中には、夫が知事になつたら妻は仕事を辞めるべきだと思つている方がいるようです。ですが、本当にそうでしょうか。みなさんよくご存じだと思いますが、一人前の研究者を育てるにはどれほどのお金と労力がかかるか。これは一人前の医師についても同じです。たくさん税金をつきこんで時間をかけて社会が育ててくれたのです。だから、夫がある地位に就いたからといって、勝手に辞めてしまうのは社会的責任を果たしていないことになりません。

また、夫が知事になつたことを理由に仕事を辞めてしまつことはとても悪いロールモデルになつてしまいます。研究者を目指す若い女性、あるいは仕事を続けた



第二部「女性医師・歯科医師交流会」 東京保険医協会の拝殿会長ご夫妻の姿も